

2017 年度 大学英語教育学会（JACET）関西支部春季大会  
JACET Kansai Chapter 2017 Spring Conference

発表要旨集 / Summaries

<基調講演/Keynote Lecture 16:30-18:00>

【5館1階 511教室/ Build 5, 1F, 511】

講演タイトル：「第二言語ライティング研究最前線：長期的観察に見られるパターンと個人差」

講師：佐々木 みゆき先生（名古屋市立大学）

発表言語：日本語

本研究は、日本人学習者の英語ライティング方略の長期的発達を、最新の理論を用いて分析したものである。方略は様々な方法で定義されてきたが、本研究では、Self-regulation 理論をもとに、「学習者は、与えられた環境に影響されながらも、目的遂行のための自己制御力を持つ」と定義され、多くの学習者に共有化されるパターンと、固有の個人差を持ちうる。このような前提に基づき、本発表では、「思いついた考えを第二言語に訳す」という「翻訳方略」が3年半でどのように変化するかを1つの例として、個人間と個人内の発達の差異、グループと個人の発達の差異を同時に勘案できる統計法を用い、又、それらが英語力、英作文力、動機づけ、留学経験などの内外要因にどの程度影響を受けるかを検証する。さらに、どのように精緻で複雑な統計法を使っても見えない「個人の内面」を、統計分析の補完データとして用い、外側から見た分析を当事者データで補う mixed-method 分析の意義も示したい。

Title: Recent trends in second language writing research: Systematicity and individuality in two developmental studies

Abstract: In this presentation, I will demonstrate how patterns shared by groups of students and individual differences can coexist by introducing the findings of two studies. In one study, two colleagues and I explored how 37 Japanese university students developed in their use of the L1-L2 Translation strategy over four years as it interacted with cognitive, affective, and environmental factors. The other study followed changes in the L1 and L2 writing ability and L2 proficiency of 22 Japanese university students over four years. In both studies, using a combination of quantitative and qualitative approaches helped capture and explain the systematicity and individuality observed in the data.

<企画ワークショップ/Invited Workshop 10:45-12:00>

**【3館5階 357教室/ Build 3, 5F, 357】**

「オンライン参照ツールを用いた英語論文の執筆—効果的な利用と指導の可能性」

講師：水本 篤先生（関西大学）

本ワークショップでは、コーパス研究と ESP (English for Specific Purposes) 研究における知見を融合したアプローチに依拠して開発された英語論文執筆支援 AWSuM (Academic Word Suggestion Machine; <http://langtest.jp/awsum/>) を中心に、無償で提供されているオンライン参照ツールを英語アカデミック・ライティング指導に活用する方法を概説する。特に、そのようなツールを、文脈中での語やフレーズの用法を検索・確認するために利用する、データ駆動型学習 (data-driven learning: DDL) の活動で用いる場合に、その利用がジャンルに基づいたライティング指導に及ぼす影響を紹介する。

<ポスター発表/ Poster Presentations 11:00-13:00 (Core Time 12:00-13:00)>

**【3館5階 351教室/ Build 3, 5F, 351】**

①<ポスター発表 1/ Poster Presentation 1> (*in Japanese*)

英語学習への不安感をさげうる教材の一提案

A Proposal of Teaching Materials to Reduce Anxiety about English Learning

中野 里香/ NAKANO, Rika (関西大学大学院生/ Graduate Student, Kansai University)

童謡は英語のネイティブスピーカーにとっては幼少期より慣れ親しんだもので、音声的にも英語の特徴を遺憾なく発揮したものであり、英国の歴史や文化も垣間見せてくれる非常に奥の深い口承文化である。これらの利点を踏まえ、本研究では、中学一年生 70 名に対してニーズ調査を行い、童謡が発音学習教材になりうるか調査した。具体的には、質問紙を用いて発音のこれまでの学習経験や、どのような音声教材で発音学習をしたいかを尋ね、また、実際に童謡を聞かせ、その印象を調査した。選択肢については 4 件法を用い、回答させた。自由記述については KJ 法を用いて数カテゴリーに分類した。結果、対象とした学習者は、学校の授業を学習の中心とする割合が高く、童謡への事前認知度は低い一方で、童謡を聞いた後には、強弱リズムがわかりやすいなどの肯定的な回答が多くみられた。これらの結果より、童謡が英語学習への不安感をさげる可能性が示唆された。

<研究発表・実践報告/ Research Papers, Practical Reports 13:00-14:40>

Session 1 【3館5階 353教室/ Build 3, 5F, 353】

②<実践報告 1/ Practical Report 1> 13:00-13:30 (*in Japanese*)

日本人大学生に対するシャドーイング音声評価結果の分析

Analysis on Shadowing Evaluation of Japanese University Students

坪田 康/ TSUBOTA, Yasushi (京都工芸繊維大学/ Kyoto Institute of Technology)

伊藤 佳世子/ ITO, Kayoko (京都大学/ Kyoto University)

近年、シャドーイングが英語力の伸長に効果があるという研究報告が増えてきているが、人手での評価は非常に手間がかかるため、授業等で実施するには容易ではない。シャドーイングの自動評価技術が簡単に利用できるようになれば、効果的なシャドーイング活動の実施が容易になるであろう。自動化の予備的な検討として、A大学の1年生向けの英語授業(2クラス、63名)で、学習者の音声データを収集し、英語教員に留意すべき発音の確認、課題文中で発話できていない箇所の確認を依頼した。その結果に対して、IRT分析や基本統計量などを計算し、課題文の難易度や学生が発話できない箇所の分析を行った。5語程度の短い課題文では90%以上の学生が発話できていたが、WPMが200以上の速いモデル音声では発話率が5割まで下がっていた。今後は分析結果を踏まえ、モデル音声の速さや課題文の再検討を行う予定である。

③<実践報告 2/ Practical Report 2> 13:35-14:05 (*in Japanese*)

リベラルアーツカレッジへのESP導入事例

ESP in a Liberal Arts College

川越 栄子/ KAWAGOE, Eiko (神戸女学院大学/ Kobe College)

神戸女学院大学は英語教育の強化を目指し、2014年度より新カリキュラムを始め、ESP教育を全学的に取り入れた。音楽学科、心理・行動科学科、環境・バイオサイエンス学科、総合文化学科それぞれの専門に関するテキストを選び専門領域に必要な基本用語を定着させ、テキストの内容を把握させるだけでなく、スピーチにより各自の専門領域を自ら調べまとめ発信する力も養成した。さらに、必修授業週4回の実現・オリジナルテキスト・OSAKA ENGLISH VILAGEとの提携・English Honors Program(英語力の高い学生対象のプログラム)等を取り入れた。その結果、入学から2年生7月までの15ヶ月で2014年度入学生はTOEIC® L&R IPのスコアが平均78点、2015年度入学生は平均74点上昇した。全国大学生1年生から2年生への上昇11点(一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会2015)に比べると大きな伸びである。新カリキュラム導入の責任者として経緯を報告する。(同大学研究所2016年度総合研究助成を受けている。)

④<実践報告 3/ Practical Report 3> 14:10-14:40 (*in Japanese*)

発音から文法へ：言語教育における体系的性

From Pronunciation to Grammar: Systematicity in Language Education

林 智昭/ HAYASHI, Tomoaki (近畿大学/ Kindai University)

講義内容、シラバス、教育プログラム、教材等の構想を練るにあたっては、一貫した指導方針が必要となる。本発表では、この種の体系的性を念頭に置いた、発音（英語音声学）を基盤とする英文法の授業実践を紹介する。ここでは、音素が組み合わさって英単語、文、段落、談話、といったより大きな単位へと広がっていくものと捉える。このような言語観に基づき、発音・文法の間を有機的に結びつけ、体系的性をもった提示を目指す。議論においては、種々の教材を取り上げ、それらの作成にあたってどのような体系的性を意図されていたのか、という点についても検討する。以上を通して、言語教材と指導のあり方について考察していく。

**Session 2 【3館5階 354教室/ Build 3, 5F, 354】**

⑤<研究発表 1/ Research Paper 1> 13:00-13:30 (*in Japanese*)

ビルボード・コーパスを用いた現代ポップ・ソングの特徴に関して

A Corpus-linguistic View on Pop Songs Based on Billboard Corpus

仁科 恭徳/ NISHINA, Yasunori (神戸学院大学/ Kobe Gakuin University)

国際社会で必要不可欠となるコミュニケーション力や音声英語を重視する昨今、多様な分野で必要とされる英語力のニーズに合致したポップ・カルチャー教材の開発や授業の実践が報告されている(穂本・濱田, 2010; 仁科, 2014; 仁科, 2016)。特に、教室内外における音楽の導入は英語教育をより実践的なものへと活性化することが期待されており、現在までにポップ・ソングに特化した大学生用英語教材も少なからず開発されている。ただし、このような教材に掲載された曲の選定に関しては、著者の主観や音楽賞の受賞曲など外的要因のみに依存しており、教材の目的が言語習得であるならば、より客観的にポップソングの歌詞を分析した上でボトムアップ的に曲を選定すべきであろう。本研究のグランドデザインは、今後どのような曲をポップ・カルチャー教材の開発時に選出すべきか、言語的側面からの客観的な参考資料を提供することにあり、詳しくは、(1)現代ポップソングの言語実態の把握、(2)英語教育において利用価値の高い曲の選定、(3)学習教材へのアプリケーション、を想定している。本発表では、時間の関係から、(1)に関して、現在までの調査結果の一部を紹介する。詳しくは、過去10年間のビルボード Hot100 にランクインした曲の歌詞をコーパス化し、ファイルネームにも様々な属性を付加し分析することで、現代ポップ・ソングの傾向と歌詞の特徴をまとめる。

⑥<研究発表 2/ Research Paper 2> 13:35-14:05 (*in Japanese*)

縦断的学習者コーパスにみる英語主要品詞の出現パターンの変化

Changes in the Frequency Pattern of Major Parts of Speech Found in Longitudinal Learners Corpus

中西 淳/ NAKANISHI, Atsushi (神戸大学大学院生/ Graduate Student, Kobe University)

多くの学習者コーパス分析では異なる習熟度の学習者データを横断的に比較している。しかし、学習者内の連続的な変化を観察するには縦断的分析が必要である。小池・投野・蒲原(2014)は2年半にわたり英語圏に滞在していた3人の日本人幼児の英語発話を調べ、時間経過に伴う品詞の使用状況の変化を観察した。本発表では、6~9か月のあいだ英語圏に滞在していた3人の日本人大学生の英語日記を縦断的学習者コーパスとし、滞在期間(月数)と主要品詞9種の出現頻度(token)の関係を調べた。その結果、3人の日記で共通して増加する品詞は前置詞や冠詞のような機能語であり、減少する品詞は形容詞であることが明らかになった。3人の作文に一定の変化パターンが確認されたことから、縦断的データによるL2産出分析の有効性が示唆された。今後さらにデータを拡大し、縦断的データ特有の変化があるか調べていきたい。

⑦<研究発表 3/ Research Paper 3> 14:10-14:40 (*in Japanese*)

“オール・イングリッシュ”授業に対する日本人英語教師と大学生のビリーフ：混合研究方法による考察

Non-native English-speaking Teachers' and University Students' Beliefs about  
“ALL ENGLISH” Class by Mixed Methods Approach

上野 育子/ UENO, Ikuko (大阪女学院大学/ Osaka Jogakuin University)

本研究は、EFL環境での”オール・イングリッシュ“という授業形態でどのような授業実践が望ましいのかを明らかにすることを目的とし、その観点から教師・学習者の持つビリーフによって目標言語(英語)使用の実践に対する捉え方に差異があるのではないかという仮説(RQ)を検証した。参加者は、大学生234名ならびに大学に勤める日本人英語教師54名で量的・質的調査を含む混合研究方法で双方のビリーフの比較調査を行った。量的調査では教員・学生を対象に質問紙の相関・因子分析を行い、質的調査では学生のビリーフ変化の観察のために個人インタビュー(半構造化面接法)を行い分析した。その結果、両者間の様々なビリーフの違いが見えてきたが、今後の英語による授業実践での教育的示唆の一つとしてまずコース初めにどの程度英語による発話や母語使用を行うのかを教員が明確にする必要性を提示した。

Session 3 【3館5階 355教室/ Build 3, 5F, 355】

⑧<研究発表 1/ Research Paper 1> 13:00-13:30 (*in Japanese*)

タスク活動が与える学習者への情意面での影響

How Does a Task Activity Have Effect on EFL Learner's Emotion?

濱地 亮太/ HAMACHI, Ryota (関西大学大学院生/ Graduate Student, Kansai University)

日本の学校英語教育では学習者のより多くの英語使用の機会が必要である。それは学習者の英語の運用能力を高めるには良質なインプットに加え、アウトプットとして実践的な英語使用が必要であると第二言語習得研究によって認められているからである (Swain, 1985; 1995)。学校英語授業で、学習者に言語使用を促す手段に様々なタスク活動が提唱されているが (e.g. 松村, 2012)、そうしたタスク活動は学習者の視点から見て、妥当なものなのだろうか。そこで今回は発表者自作のタスクを用いて、タスクによる学習が学習者へ与える情意面への影響を調査した。具体的には、私立大学に通う 26 名の大学生を対象にタスク活動実践後の意識調査 (質問紙・面談) を行った。事前の英語学習経験に関する質問紙調査と合わせて分析した結果、学生の英語学習経験・態度とタスクへの意欲との関連性が明らかになり、今後のタスクデザインの足がかりを得ることができた。

⑨<研究発表 2/ Research Paper 2> 13:35-14:05 (*in Japanese*)

音韻認識からはじめる「読むこと」へのゆるやかな 5 ステップス: リタラシー・アクションプランの効果

A Gradual Five-step Process Shifting from Phonological Awareness to Reading Readiness: The Effectiveness of a Literacy Action Plan

柏木 賀津子/ KASHIWAGI, Kazuko (大阪教育大学/ Osaka Kyoiku University)

中田 葉月/ NAKATA, Hazuki (寝屋川市教育委員会/ Neyagawa City Board of Education)

小中連携の英語教育における文字指導 3 年間の成果について発表する。担任が取り組みやすい帯活動の文字指導を、『ゆるやかな 5 ステップス』(1 音韻認識以前, 2 音韻認識, 3 音素と綴りを繋ぐ, 4 単語と綴りの関係, 5 音素認識で読む) を多感覚で行えるように作成し、寝屋川市 (特区) で年 15 回の研修を行った。指導の効果は「耳を澄ましてクイズ」を作成し検証した。対象者は、A 小学校 138 名, B 小学校 116 名で、15 分の帯活動を 20 回行った (300 分)。初頭音 (Onset) とその綴りの一致について、事前と事後に有意な差がみられた (一例: A 小学校 6 年生 68 名,  $t(67) = 7.54$ ,  $**p = .000$ ,  $r = .68$ , 効果量大)。また、頭韻の聞き分けが得意群と苦手群では、初頭音と綴りの一致 ( $f \cdot ish / ch \cdot erry$ ) に有意な差がみられた。初歩の「聞き分け」(音韻認識) が読み書きに影響を及ぼすことが示唆された。3 年目は、小中連携段階の脚韻の聞き分け、母音と子音のまとまりの音 (Rime) とその綴りの一致の調査を行う。

⑩<研究発表 3/ Research Paper 3> 14:10-14:40 (*in Japanese*)

英語の辞書使用について — 訳語の視点から —

Some Suggestions on Using Dictionaries - From the Standpoint of Correctness of Translated Words -

山本 元子/ YAMAMOTO, Motoko (常磐会学園大学/ Tokiwakai Gakuen University)

日本での英語の学習において、英語の辞書は必須の学習道具であり、学習者はもとより英語教員も多くが辞書を使用している。より正確な英語理解を考えたとき、英和辞書に提示された訳語の意味を彼らが鵜呑みにした場合、検索する語句によっては本来の英語の意味と異なる理解となる場合が生じる事は問題であると考えられる。そこで、中高教員が指導に際し、英英辞書の併用または確認を行い、それを伝えることが学習者のより正確な英語の学びにつながるということを述べる。

本論では、“sarcasm”と“irony”を例に、一般的に使用されている（市井の書店で容易に購入可の意）8種類の英和辞書の記述と10種類の英英辞典の記述を調べ、比較する。加えて幾つか他の例を示す。その上で、英和辞書の訳語には限界（不備）があり、英和辞書だけに頼る学習では不十分であることを考察し、学習者のより正確な英語理解につなげるための具体的な指導例を提案する。

<ワークショップ、コロキウム / Workshop, Colloquium 14:50-16:20>

**Session 4 【3館5階 353教室/ Build 3, 5F, 353】**

⑪<ワークショップ/ Workshop> 14:50 - 16:20 (*in Japanese*)

エクセルでできる IF 関数を用いての簡単で実用的な自動成績計算方法

Easy and Practical Auto Scoring Method Using IF Function with Excel

上田 眞理砂/ UEDA, Marisa (立命館大学/ Ritsumeikan University)

(この workshop に参加をご希望される方は、laptop computer と USB を各自ご持参下さい。)

エクセルでできる IF 関数(Excel の関数の中でも特に利用機会の多い関数。「もし、～だったらどうするか」を決める関数)を用いて、簡単でしかも実用的な自動成績計算法や並び替え、関連する様々なグラフ作成法などを、実際にエクセルを操作しながら、一段階ずつ、わかりやすく紹介する。大学教員は毎年、膨大な人数分の成績処理をしなければならない。特に、語学に関する評価方法は、多くの大学では、平常評価法を用いているので、総データ数は膨大である。本ワークショップでは、まず基本編として、発表者の勤務大学での評価基準を例として、ノウハウを紹介する。次に応用編として、参加者各自の持参パソコンで、各々の勤務先の評価基準を用いて、実際に実技体験してもらう。本ワークショップを通して、参加者が膨大な人数分の

成績処理を、より簡単に、迅速に、正確に実行できるよう、一段階ずつ、わかりやすく紹介する。

### Session 5 【3館5階 354教室/ Build 3, 5F, 354】

⑫<コロキウム / Colloquium> 14:50 - 16:20 (*in Japanese*)

大学英語クラスにおける授業研究のアプローチとは：社会文化理論による研究ケースと考察  
Tertiary Level EFL Classroom Research: Case Studies Using a Sociocultural Perspective  
and Discussions on Research Methods

長尾 明子/ NAGAO, Akiko (龍谷大学/ Ryukoku University)

西条 正樹/ NISHIJO, Masaki (立命館大学/ Ritsumeikan University)

上條 武/ KAMIJO, Takeshi (立命館大学/ Ritsumeikan University)

近年外国語教育では教育心理学による自己調整学習 (Self-regulated Learning) という理論が取り上げられている (Dornyei, 2005; Oxford, 2011)。教育心理学から見た理論では、メタ認知、認知ストラテジー、動機づけという要素が学習成果に重要とされている。Oxford (2011) は、この理論的な枠組みにクラス環境の媒介を重視した Vygotsky の社会文化理論を加えることを提唱している。社会文化理論からの見解は、教育心理学による自己調整学習理論では十分に言及されていない、教室環境やコンテキストの学習活動や学習過程を重視するものである。このコロキウムは、社会文化理論から見た L2 学習者自己調整学習のモデルをいかに実践研究へ応用させていくかということに興味がある研究者や教員を対象とする。始めに、教育心理学と社会文化理論の観点より見た自己調整学習のモデルをそれぞれ説明する。次に、社会文化論のモデルをもとにした質的および混合研究法を取り入れた実践報告のケースを 3 つ紹介する。それぞれで使用された研究手法をふまえ、発表者とコロキウム参加者が、社会文化理論によりいかに授業実践の研究に取り組むことができるかという考察を行う。